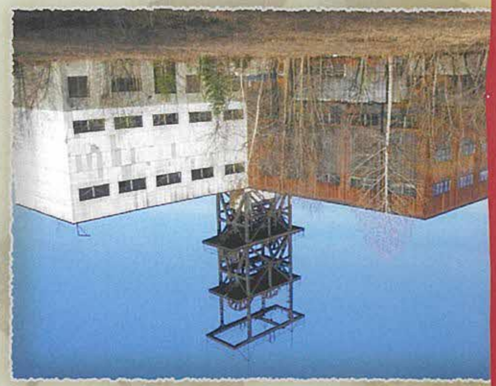
赤平の炭鉄港ストーリー

赤平の石炭の歴史は、1857(安政4)年、北海道の名付け親として知られる松浦武四郎が空知川の沿岸で石炭を発見したことから始まります。その後は輸送する手段が無かったため開発が進みませんでしたが、1913(大正2)年に滝川一下富良野間に鉄道が開通したことで多くの炭鉱が開坑していきます。1918(大正7)年に赤平で最初の大型炭鉱として茂尻炭礦が開坑、1937(昭和12)年に豊里炭鉱、1938(昭和13)年に赤間炭鉱と住友赤平炭鉱と大手の炭鉱が次々と開坑し、中小炭鉱も全て合わせると77もの炭鉱が赤平にはありました。

多くの炭鉱が稼働する中で人口は増加し、1954(昭和29)年に道内18番目の市となりました。1960(昭和35)年には、人口もピークの59,430人を数え、赤平駅の1年間の貨物取扱量が大阪・梅田駅を抜いて日本一を記録するなど、地域の発展を支えました。しかし、昭和30年代後半から石炭産業の衰退を余儀なくされ、平成6年には最後の一山が閉山し、赤平の「石炭の歴史」に幕を下ろしました。

その後赤平は鉱業都市から工業都市へと産業構造の転換を図り、炭鉱で培った技術などを活かしたものづくり企業の誘致を積極的に行ってきました。そんな中2003(平成15)年に第6回国際鉱山ヒストリー会議が行われたことがきっかけで炭鉱遺産保存への機運が高まります。2016(平成28)年に旧住友赤平炭鉱の施設を住石マテリアルズから赤平市が無償譲渡を受け2018(平成30)年に赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設がオープンし、赤平の石炭の歴史を今に伝える役割を担っています。



炭鉄港
タンテツコウ

赤平 AKABIRA 歴史をめぐる旅物語

日本遺産とは

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産(Japan Heritage)」は地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。
【本邦国策を北海道に観よ!～北の産業革命「炭鉄港」～】は令和元年度日本遺産に認定されました。

日本遺産ポータルサイト　https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/

ひと・自然・産業が輝く 協働と共創のまち

赤平市は北海道のほぼ中央部、空知川流域に位置しています。東は芦別市、西は滝川市、南は歌志内市、北は深川市に接しており、東西に約14.1キロメートル、南北に約18.5キロメートルで、市域面積は129.88平方キロメートルあります。1891(明治24)年に開拓の鍬がおろされ、1922(大正11)年4月1日、歌志内村から分村して2級町村赤平村が誕生。さらに1943(昭和18)年2月11日町制を施行。そして1954(昭和29)年7月1日道内18番目の市となりました。1960(昭和35)年には、人口もピークとなる59,430人を数えましたが、石炭産業の衰退にともない人口も減少していきました。現在は炭鉱産業遺産を生かした観光に力を入れ、魅力的なまちをつくり、「ひと・自然・産業が輝く協働と共創のまち」を目指しています。

【札幌から】
車 ：約1時間30分(道央自動車道経由)
JR ：約1時間50分(函館本線→根室本線)
バス：約1時間40分(高速バス)

【新千歳空港から】
車：約1時間50分(道央自動車道経由)
JR：約2時間40分(千歳線→函館本線→根室線)

【旭川空港から】
車：約1時間30分(道央自動車道経由)
JR：約2時間30分(空港リムジンバス→函館本線→根室本線)

制作：炭鉄港推進協議会（事務局：空知総合振興局地域創生部地域政策課）
〒068-8558 北海道岩見沢市８条西５丁目
電話番号：0126-20-0146　FAX 番号：0126-25-8144

炭鉄港 北の産業革命の物語
http://www.sorachi.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/tantetsuko.htm

歴史をめぐる旅物語 **炭鉄港**
赤平

文化庁
令和元年度文化資源活用事業費補助金（観光拠点整備事業）

パンフレット背景色は12市町それぞれの炭鉄港イメージカラーです　【赤平：市名より】

北海道の近代化を支えた 三都を結ぶ物語

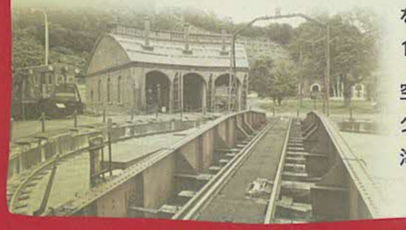
北海道の近代化は、1872(明治5)年、石造埠頭の建設が開始された小樽からスタートしました。その後、小樽が北海道のゲートウェイとして一段の飛躍を遂げる契機となったのは、1879(明治12)年、北海道初の近代炭鉱である官営幌内炭鉱(現在の三笠市幌内)の開鉱でした。

その石炭を運ぶための幌内鉄道は、北海道初の鉄道として、まずは1880(明治13)年に手宮(小樽)～札幌間が部分開通、1882(明治15)年には幌内まで全通しました。幌内鉄道は、小樽港への石炭運搬だけではなく、北海道内陸部へ入植する人や収穫した農産物の輸送に活躍するとともに、人や物資の輸送円滑化を通じて道都札幌の発展も支えました。

1889(明治22)年、炭鉱と鉄道は元薩摩藩士の堀基が設立した北海道炭礦鉄道会社(北炭)に払い下げられ、同社によって空知炭鉱(歌志内)と夕張炭鉱(夕張)の開発が進められました。それに伴い、1892(明治25)年に室蘭まで鉄道が延長され、岩見沢が道央圏を東西南北に結ぶ鉄道の交点として、室蘭が石炭積出港として発展する礎となりました。

1906(明治39)年には、鉄道が国有化されました。北炭は、その売却資金をもとに、英国企業2社との合弁により、室蘭に日本製鋼所を設立。1909(明治42)年には製鉄へと進出し(輪西製鉄場:現在の日本製鉄室蘭製鉄所)、室蘭は鉄の街として不動の地位を確立しました。

一方、鉄道国有化によって北炭の独占輸送体制が崩れ、財閥各社は一斉に空知へ進出し、これを足がかりにして日露戦争で獲得した樺太へと勢力を伸ばしました。このことが小樽港の一層の発展を促して、1914(大正3)年の小樽運河の開削へとつながっていきます。



空知・小樽・室蘭の三都を結ぶ鉄道は、全道の鉄道ネットワークの機軸となり、三都の基幹産業である石炭・港湾・鉄鋼は、北海道の産業化を先導してきたのです。

・この地図は空間情報データベース GISMAP を使用して作成した。　・この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の２万５千分の1地形図を使用した。（承認番号　令元情使、第 415-GISMAP42767 号）

空から炭鉄港

～赤平市～

AKABIRA CITY

赤平トリビア

～赤平事件～

1952（昭和27）年5月24日午後5時30分頃、その日行われる予定だった劇団前進座（ぜんしんざ）の「俊寛」の巡演が、当日になり校舎使用交渉不成立を告げられて会場が使用できなくなりました。しかし一行は午後9時40分まで演劇を公開、座員の一部が逮捕されましたが当時の三代目中村翫右衛門（かんえもん）は逃走、その後1週間以上逃亡しながら舞台には登場するという離れ業を演じ「神出鬼没の翫右衛門」の異名をとったともいわれます。

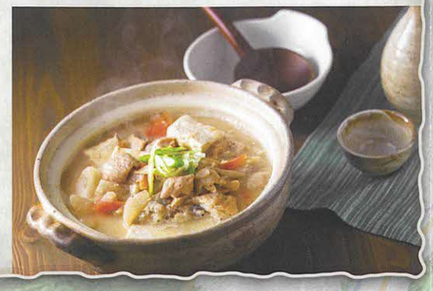
炭鉄港 グルメ

～がんがん鍋～

力仕事をする労働者が集まる街では、多くの地域でホルモンが好んで食べられます。炭鉱町だった赤平市でもホルモンを使った鍋は一般的な家庭料理でした。

炭鉱が閉山した今でもその文化は受け継がれ、家庭料理だったホルモン鍋は「がんがん鍋」という名前がついて新名物料理となりました。この名前には「ストーブをガンガン焚いて、ガンガン煮込み、ガンガン食べて、ガンガン語り、ガンガン働く」といった当時の炭鉱長屋の生活への思いが込められています。

味噌ベースで豚ホルモンを使うこと以外はそれぞれのお店独自の味。赤平市の郷土愛と炭鉱の歴史がぐつぐつ煮込まれたこの「がんがん鍋」、一回食べてみればいいんでないかい?



炭鉄港 構成文化財

住友赤平炭鉱立坑櫓

右記参照

空知川露頭炭層

～150年前の姿を今に伝える露頭炭層～

石炭は、数千万年から数億年前の植物が完全に腐敗分解する前に地中に埋もれ、そこで長期間地熱や地圧を受け変質したことにより生成されます。生成された石炭層が地殻変動などにより地表面に現れたのが露頭炭層と呼ばれます。空知川露頭炭層は、約160年前の1857（安政4）年に松浦武四郎が発見し、その後の空知炭田開発の端緒となったとされる露頭炭です。

北炭赤間炭鉱ズリ山

～日本一の階段数を有するズリ山～

赤平の中心市街地にある北炭赤間炭鉱のズリ山（標高:197.65m、平均斜度:18度）です。1992（平成2）年に階段と火文字を設置しました。火文字は、夏のあかびら火まつりのクライマックスとして点火されます。ズリ山階段としては、長崎県佐世保市世知原町の555段や岩見沢市栗沢町の万字炭鉱森林公園775段（階段の直線部）を抜いて日本一の階段数（直線部分777段）で、頂上の展望広場からは赤平市街が一望できます。

ココ見て！炭鉄港

炭鉄港女子の

大倉加奈 さん

炭鉱が好きすぎて北海道赤平市に移住。NPO職員、フリーデザイナーとして活動中。

住友赤平炭鉱立坑櫓

～立坑櫓内部を見学することができる国内唯一の施設～

1963（昭和38）年に、深部開発（採掘）のため総費用約20億円をかけて建設され、1994（平成6）年の閉山時まで使用されていました。人員と炭車を大量に昇降させ、石炭生産コストを飛躍的に削減した「合理化の優等生」ともいえる立坑です。2018（平成30）年7月には「赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設」がオープンし、実際に炭鉱で働いていた方を中心としたガイドの解説を聞きながら、立坑櫓の建屋内部を見学することができる国内唯一の施設となっています。

【開館時間】9:30～17:00

外観:常時公開　内部:毎週水～日曜日公開（立坑ヤード内部は有料ガイドの際に見学可能）

【休館日】月・火曜日（ただし、この日が祝日の場合は開館し、直後の平日が休館日）

【入館料】赤平市民:大人（中学生以上）200円、小学生無料、障がい者 150円

市外の方:大人800円、小学生 300円、障がい者 600円※団体（20名以上）割引あり。